

君死に給うこと勿れ

岩崎 裕



私はまた命拾いをした。

二〇二二年一月と十月の二回、私は脳梗塞で救急搬送され、一ヶ月の入院後、ほとんど後遺症もなく、奇跡的に普通の生活ができるくらいに回復した。

私は今年の十一月で九七歳になる戦争体験者だ。

私の父親は昭和八年の九月に四八歳で他界したので、父の倍の生涯を生きたことになる。

私は沖縄で生まれた。沖縄の家での父の印象的な姿がある。昭和八年八月の朝。新聞を読んでいた父が突然、「馬鹿な……」と言った。暫くの沈黙の後、

「日本とアメリカが闘うなんて、大人と子供が相撲を取るようなもので、日本はすぐに投げ飛ばされるよ」

そう言っ一人憤慨していた。新聞には「日米もし戦かわば……」と書かれていた。その後間もなくして、仕事で上京したまま父は病死してしまい、それを機に私たち家族は沖縄から東京の愛宕神社の下へ生活の場を移す。

高校生になった頃、田園調布へ引っ越した。そこで私は

徴兵された。

いつの日か我也めされむされどわが生き証は誰がしらめやも

これは私が徴兵された時の気持ちを表現したものだ。

その時の心境を詳しく、私が寄稿した早稲田大学の同人誌『狂想』（昭和二五年創刊）の引用で紹介したい。

『戦中の思い出「塞翁が馬」より』

馬年の平成二年にわれ思う人生ばんじ塞翁が馬

自分の心境をこう年賀状に書いて、友人知人に送った事がある。

（中略）

と言うのは、私ですら徴兵検査の結果が第三乙種合格で、病気療養中であろうとなかろうと、その人間が障害者でない限り、誰でも戦争に駆り出されると言う末期的状態

になっていた。我は覚悟した。だが覚悟したと言っても当時の私はまだ数えて十九才、この世に生を受けて十八年と数ヶ月、将来に対する夢や未知への憧れは数多くあった。たとえば自分の処女歌集を出したいとか、小説を書きたいとか、もう少し勉強して外国文学の翻訳や文芸評論を書きたいとか。それらが今世で果たせぬまますべてが終わるかと思うと、自然と涙がこみ上げて、娑婆への未練に心が乱れた。「いつの日か我也召されむされどわが生き証は誰が知らぬやも」私は涙を押さえてこう日記に書くと、これを

自分の辞世にしたいと思った。その頃は、「打ちてし止まむ」とか「大君の辺にこそ死なぬ、かえりみはせじ」の時代だっただけに、これは女らしすぎると思ったが、その様なことは、もうどうでもよかった。ただ自分を偽らずに、真実を吐露することが、自分の魂の救いになる様な気がしたのは事実である。それから数ヶ月して、ついに私の手許に通の入隊通知が届いた。入隊先は長野県松本市の歩兵連隊であった。（後略）

戦時中のことを寄稿したもう一つを全文紹介したい。

『とっておきの話』

昨年「狂想」十三号で、私は戦中の思い出を一つ書いた。今回もまたそのシリーズのひとつとして、どうしても書き

残したいこと、いや正直言っ、出来るだけ多くの人に聞いてもらいたい話として、あえてこゝにそれを記述したいと思う。

昨年は終戦五十周年で、いろいろな行事があった。私は偶然にも、英語圏の外国人達や日本の英語関係者達を前にして、この話を英語で語る機会があった。スピーチのタイトルは、ウト・ア・ブレイヴ・マン・ルテナント・タムラ「何んと言う勇者・田村中尉」であった。話終わった時、傾聴者の中からどよめきがあった。そして閉会后、「ナイス・スピーチ・サンキュー」と言っ、握手を求めめる幾人もの外国人が跡を絶たなかった。私はこの話をしてよかったとしみじみ思っ。話は今から五十二年前に遡る。その頃、日本の戦況は風雲急を告げ、初の学徒出陣が決まった年である。我々は旧制中学の最終学年で、軍事工場に派遣されたまま、勤労奉仕に明け暮れていた。それでも週に、一回は登校日があり、学校で軍事教練だけがあった事を覚えている。そんなある日、登校日の朝礼時、陸軍省から派遣された新しい配属将校が我々の前に現れた。朝礼台に立っ、拳手の礼をした彼は、軍服のせい、陸軍中尉の肩章が凛々しく眩しく見えた。我々は軍服の威圧感に暫く緊張の面持ちであったが、新任の配属将校を紹介する校長の口から、その略歴を聞くうちに、徐々にほっとした安堵感が湧いてくるのを覚えていた。それは、彼が純粹の職業軍人

ではなかったからだ。名前は田村で、軍隊以前は、早稲田大学の文学部で英文学を学び、卒業後は、英語教員として、青森の女学校に奉職していたと言う。恐らく軍隊にとられてから、幹部候補生を志願し、将校に任官したのであろう。しかしこの女学校と言う語が、校長の口から洩れた時、思わず内心笑みがこみ上げてきた。と言うのは、今まで軍事教官とは、余りにも異色な経歴だからである。それに、その頃は男女七歳にして席を同じゅうせざるの世の中で、男子は男子校に、女子は女子高に通う時代であった。だから女学校とは、男子にとって、覗くことの出来ない世界であった。それだけに、女学校と言う語には、好奇心をくすぐる官能的な響きがあった。その禁断の園の様な女学校を教えていた彼——私はこの時、昭和十二・三年頃書かれた石坂洋次郎の「若い人」を思い出していた。女学校に赴任したばかりの、若い男性教師の悩みを書いた小説であった。「彼もまた若い人か……」と再び笑みがこみ上げてきた時、ふと私の頭を掠めたのは、軍国主義に徹した厳しい軍人のイメージからはほど遠い、自由で明るいヒューマニストとしての彼の人間像であった。この印象は正しかった。それから数か月のことである。田村教官引率のもと、学校から代々木の練兵場まで、銃を担って行軍した事があった。教官は、その日に限って、いつになく厳しい顔付をしていた。その表情は、行軍中も変わりなかった。途中、町中ですれ違う

營だとされている様だが、はたしてそうだろうか。この戦争は必ず終わる時が来る。その時、この荒廃した日本を再建するのは、誰だと思ふ。生き残った僅かの大人ではない。生き残った君たち大勢の若い力だ。若い君達の活力こそが、戦後の日本に、一番求められているものなのだ。だから今君達が軽率妄動して命を落とすことは、将来の日本にとって、いや世界全体にとって、どれだけ大きな損失になるか、君達に分かるだろうか」教官の声は熱を帯びていた。みんな狐につままれた様に、話の中に吸い込められて行った。……あれから、もう五十年以上がたつ。当時の仲間で、戦死したのは僅か一名だけ、みな無事に復員して現在に至っている。陸軍省の配属将校で、軍国主義の看板を掲げねばならなかった教官が「君死に給うこと勿れ」と我々を諭した勇氣ある発言は、素晴らしいメッセージとして、永遠に忘れられないだろう。と同時に、いま日本がこの様にあるのも、かかる無名の礎石があったからこそ思ふのは、わたしだけの感傷であろうか。

私が早稲田大学英文学科へ進んだのは、田村中尉との出会いがきっかけかもしれない。

私はその後、英語の世界で生きた。紆余曲折あったにせよ、良い人生だったと思う。

兵隊達の敬礼にも無表情で答え、たえず何かを深く考えている様子であった。その時教官が何を考えていたか、すべては後で分かるのだが、当時の思想弾圧の中で、軍国主義に洗脳された若者を如何に目覚めさせ、正しい方向に歩ませるか、心はその事で激しく揺れ動いていたに違いないかと想像する。その内面的な動揺は、まず彼の行動に現れた。練兵場に着くと、突然廻れ右をし、そのまま、学校に向けて、再び行軍と言う指令を彼は下した。「前へ進め！」我々の当惑におかまひなく、彼は足早に先頭に立った。こゝで小休止があると思っていただけに、肩に傳わる銃の重みが急に二倍に感じられ帰路の行軍はつらいものとなった。学校に着くと、皆くたくたになって、銃を抱えたまま校庭にしゃがみこんだ。数分して、集合の号令がかかった。しかし疲労困憊の我々は、銃にすがりついて、なかなか立ち上がれず、整列するのに時間がかかった。この場合、普通の教官なら、一人一人にびんたを食わすのが常套である。ところが、どうであろう。怖怖あけた我々の目に映ったのは、微笑を湛えた教官の姿ではないか。彼は我々をまわりに近寄せると、こう話し始めた。「君たちも承知の様に、徴兵年齢が下がってきた。間もなく君たちも戦争に行くだろう。だが命は惜しめよ。一旦この世に生を受けた以上、命がどういふ意味を持つか、君達は考えた事があるだろうか。特攻隊を志願して、敵と刺し違えるのが若者の名

第二次世界大戦を体験した者として、第三次世界大戦が起きないことを心から願う。



岩崎 裕
いわさき ひろし

1926 沖縄県那覇市生まれ
8歳の時、父・安田源右衛門(沖縄製糖(株)取締役)の死をきっかけに上京
18歳の時、徴兵される
戦後、早稲田大学英文学科で学ぶ
35歳の時、「グリーン外語専門学校」設立
85歳の時閉校
現在 96歳、田園調布近くの浄行寺役員